

# Juichi WAKISAKA Race Report

2014 AUTOBACS SUPER GT Round 8 – MOTEGI GT 250km RACE -

◆◆ チーム最高位を目指し奮闘、2戦連続 6位でシーズンを終了 ◆◆

No. 19 Weds Sport ADVAN RC F		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	7位	6位



## ■大会概要

開催日：2014年11月15日-2014年11月16日

サーキット：ツインリンクもてぎ（栃木県芳賀郡、コース全長：4.801km）

レース距離：53周（254.473km）

入場者数：予選日15,500名、決勝日32,000名、合計47,500名

2014年SUPER GTの最後を飾るのは、栃木・ツインリンクもてぎで行われる「MOTEGI GT 250km RACE」。11月15-16日、晩秋のもてぎは両日とも青空が広がり、時折日差しが照る天候に恵まれ、最終戦の行方を見守ったファンにとっては絶好の観戦日和となった。

今シーズン、チームを移籍、No.19 WedsSport ADVAN RC Fで戦うことになった脇阪寿一。チームパートナーの関口雄飛選手、そしてチームスタッフとともに一戦一戦を全力で戦い、さらなる進化を追い求めるシーズンを過ごしてきた。

前回のタイ戦から、クルマのポテンシャルが格段に飛躍。戦闘力が増したクルマでの戦いをこのもてぎでも披露しようと、入念なミーティングを重ねてもてぎ入り。予選7番手からスタートし、後半を担当した脇阪は前後車両との手に汗握るバトルを繰り広げ、場内を大いに盛り上げた。そしてタイ戦に引き続き、2度目のチームベスト、6位入賞を達成。タフなシーズンに幕を引いている。

今回のレースウィークは、金曜日にスタート。通常開催1ヶ月前を目安にGTA主催の公式テストが実施されるが、前回のタイ戦以降のスケジュール上、今回は直前の金曜日に公式テストが設けられることになった。レース中のアクシデント等を想定したセーフティカー訓練とは別に、およそ3時間の走行時間が与えられ、その中でクルマのセッティング確認をはじめ、タイヤ選択等の細かな作業を時間の許す限り続けた。

## ■11月15日(土)

09:00-11:00 公式練習

13:45-14:00 ノックアウト予選(Q1)

14:30-14:42 ノックアウト予選(Q2)

### 【公式練習】6番手 / 1'39.462

冷たい空気が漂うも、澄み渡った青空が一面に広がった予選日のツインリンクもてぎ。公式練習が午前9時から2時間にわたってスタートする。気温10度、路面温度15度と肌寒さを感じる中、まずNo.19 WedsSport ADVAN RC Fのステアリングを握ったのは関口選手。前日の走行を受け、さらにセットアップを進めたクルマの状況を確認する作業に入った。

シーズン中に課せられたウェイトハンディもなくなり、元来のコンディションでガチバトルを繰り広げることが予想される今大会。事前のテストもなく、慌ただしく開幕戦を迎えたチームにとっては、改めてライバル達と真っ向勝負に挑む戦いでもある。そんな中、チームとして追い風となったのがタイヤパフォーマンスの向上。前回のタイからその流れはあったが、このもてぎに来てからも上昇気流は健在で、事実、前日のテストでは8番手のタイムをマーク。そしてこのセッションでも最終的に6番手を獲得。午後からの予選に向けて一層気合が入る結果となった。

なお、この公式練習のセッションで、本来ならば終盤に脇阪がニュータイヤを装着して予選シミュレーションを行うメニューが準備されていたが、その予定を変更。関口選手が担当する Q1 突破を確実なものにしたいという脇阪、そしてチームスタッフの考えがまとまり、3 セット目のニュータイヤが装着された No.19 WedsSport ADVAN RC F に再び関口選手が乗り込み、最終確認を行っている。



### 【ロックアウト予選 (Q1)】 3 番手 / 1'39.351

ストップ&ゴーのレイアウトをもつもてぎでは、予選で少しでも前のグリッドに着くことが、決勝での好順位につながる。ましてや今回、ガチバトル対決ともあればなおさら。総合的なパフォーマンスに勢いが出てきた No.19 WedsSport ADVAN RC F としては、ぜひ今シーズン最上位の予選結果を手にしたところだ。

チームでは、Q1 の出走に関口選手を送り出す。GT300 の Q1 を経て、午後 1 時 45 分、GT500 の Q1 がスタートする。気温 14 度、路面温度 21 度と恵まれたコンディションの中、いつもの通り全車すぐにはピットを離れず、アタックのタイミングを待つことに。15 分のセッションを折り返す前によくピットを離れ、ウォームアップを始めたが、そこで 1 台の車両がマシントラブルによりコース脇に急停止。これを受け、セッションは赤旗中断となった。

その後、残り時間 7 分でのアタック再開となり、今度は 14 台の車両がすぐさまアタックモードへと突入する。関口選手も同様に懸命のアタック。チェッカーまで残り 3 分、それまで 1 分 39 秒 718 の自己ベストタイムで 7 番手にいた関口選手だったが、ラストアタックで 1 分 39 秒 351 とタイム更新に成功。トップとは僅か 0.093 秒の差で 3 番手の好順位を獲得。見事、Q1 突破を果たした。

### 【ロックアウト予選 (Q2)】 7 番手 / 1'39.771

午後 2 時 37 分、いよいよ Q2 がスタート。12 分間のセッションに対し今度はどの車両もセッション開始とともにグリッドを離れ、アタックを開始する。気温 14 度、路面温度 21 度とほぼ Q1 と同じ数値を刻む中、ステアリングを握った脇阪。今週末初めてのニュータイヤで Q2 に挑んだ脇阪にとって、ぶっつけ本番のアタックではあったが、脇阪自身も午前中の公式練習時よりも大幅にタイムアップを果たして 1 分 39 秒 771 をマーク。ポジションこそ 7 番手でチェッカーを受けたが、その手応えは十分だった模様。アタックを終えた脇阪も、「自分自身としてはいいタイムが出た」と納得した表情を見せた。

しかしその一方で、悔しい気持ちも見え隠れする。「前日のテストで、クルマとタイヤの方向性が見え、手応えを感じていました。予選 7 番手は今季ベストグリッドだし。でも Q1 では関口選手が 3 番手だったのに、僕が 4 つポジションを下げることになりました。このレースウィークはじめてニュータイヤを装着したということもあり、非常に難しいアタックとなりましたね。しかし、決勝へと繋がるいい流れはあるので、明日は必ずいい戦いをします」と気持ちを切り替えた。「今回はサーキット入りを前に、坂東監督、チ

ームスタッフ、そして関口選手と“予選、決勝ともに今年ベストリザルトを出す”と誓ってもてぎにやってきました。その熱い思いで表彰台を目指し、ファンのためにも頑張ります！」と力強い宣言も飛び出した。



## ■ 11月16日(日)

09:15-09:45 フリー走行 (09:55-10:10 サーキットサファリ)

13:00- 決勝 (53周)

### 【フリー走行】 11番手 / 1'41.881

前日同様、決勝日もすっきり晴れ渡る天候に恵まれたもてぎ。サーキットには3万2千人のファンが詰めかけ、ピットワークはもちろん、このあとの決勝レース、そしてファイナルイベントを心から楽しむ一日を過ごした。

午前9時15分、気温8度、路面温度12度の中、フリー走行がスタート。30分間の短いセッションで決勝に向けての最終調整を行うことになる。No.19 WedsSport ADVAN RC Fは11番手のタイムに留まったが、いくつか準備された決勝の戦略を見極めるため、丁寧な作業に徹した模様。加えて、セッション後に行われたサーキットサファリでもセットアップを行うなど、限りある時間を有効に使い、今年最後の戦いに向けて準備を整えることになった。



### 【決勝】 6位 / 5ポイント獲得 (シリーズポイント: 17ポイント、シリーズランキング: 15位)

決勝レースは午後1時スタート。先立って栃木県警によるパレードランが実施され、パトカーと白バイがそれぞれ2台ずつコースランし、その後方にはSUPER GT車両がウォームアップを兼ねて走行。直後にフォーメーションラップが行われ、53周にわたる戦いが幕を開けた。

No.19 WedsSport ADVAN RC Fのスタートドライバーは、関口選手。前方車両2台がS字で接触するという荒れたオープニングラップを経て、ひとつポジションアップを果たして順調に周回を重ねていく。シリーズチャンピオン争いが激化するのを尻目に、ペースアップを見せる関口選手。順調に周回を重ねる中、チームにはクルマのフィーリングがよく、タイヤへの負荷も少ない状態で走行できているというインフォメーションが入る。

こうなれば、大きな賭けに出るべきではないかという思いが大きくなるチーム、そして脇阪。少しずつポジションを上げ、ライバル達が徐々にルーティンワークのピットインを始めてもなお周回を重ねるNo.19 WedsSport ADVAN RC F。スタートドライバーとしては最長となる33周を走り切ってピットイン、待ち受ける脇阪へとステアリングを委ねた。

このときすでにチームではタイヤ無交換を決断。すべてはベストリザルト獲得のためだ。強い気持ちでコースへと向った脇阪。熱が入った状態でフィーリングよく周回できるかと思っただが、実のところガソリンの補給によってクルマのバランスが変化。それが原因でタイヤへの攻撃性が増したことから、少しずつクルマの変化が見え隠れし始めた。

オーバーステア、リアブレーキのロック、そしてアンダーステア…と刻々と状況が変化し、一筋縄ではいなくなったコンディションの中、脇阪はしぶとくしたたかに、そして決して集中力を切らすことなく1周、また1周とレースを消化していく。全車がルーティンワークを終えて2番手のポジションをキープ、この勢いをなんとか継続させたいと願ったが、終盤に入ると後方からの猛追が一層激しくなり、脇阪はタフな攻防戦に挑むこととなった。

相手は脇阪同様、キャリアあるトップドライバーばかり。互いの車両の特性を生かしつつ、緩急を突いた走りで相手のミスを誘わんと、巧みな走りを繰り広げる。迎え撃つ脇阪も百戦錬磨。この様子に観客が盛り上がったのはモチロンのこと。最後の最後までもつれたバトルだったが、結局のところタイヤ無交換を敢行したことでタイヤが厳しいコンディションになり、次第に持ちこたえるのが難しい状態となったため、先行を許してしまう。結果、No.19 WedsSport ADVAN RC Fは6位で今シーズン最後のチェッカーダフラッグを受け、レースを終了。タイ戦に続き、ベストリザルトとなる6位で熱い戦いを終えた。



見どころある戦いを披露した脇阪。「ものすごくクリーンなバトルでした。気持ちよいくらいバトルができたことをライバルたち（18号車伊沢選手、24号車クルム選手、46号車本山選手）に感謝したい」とひと言。そしてレースでの戦略を以下のように振り返った。「レース前半、関口選手がすばらしい走りをみせてくれました。実は朝のフリー走行でタイヤが厳しい状態であると知らされていたので、タイヤ無交換という戦略はまったくなかったんです。ヨコハマタイヤさんから絶対交換してください、と言われていました。そんな中、関口選手の頑張りで2位の座が見えてきたんです。彼からは、決勝中のクルマのフィーリングがいい、タイヤ無交換でも大丈夫では、という的確なコメントが入っていました。今回、チームのみんなでシーズンベストの結果を残そうと心に決めていたので、表彰台を目指そうと。相当迷いましたが、最後には無交換を決めました」。

一方でしびれるようなバトルについては、「クルマのコンディションが変化し、難しい状況になったので、まず37号車にパスされ、

次は 24 号車、18 号車、46 号車と続々迫られました。とにかく前でゴールしようと意地を張ったんですが、キツかったですね。結果的に 18 号車、24 号車、46 号車の順に次々と前へ出られてしまいました。本当にいいバトルができました。皆さんには順位を下げるようになって申し訳ない気持ちでいっぱいですが、チームみんなで頑張った結果です」と悔しさをにじませた。

最後に改めて今シーズンを振り返った脇阪。「非常に厳しいレースになりましたが、チーム、タイヤメーカー、ドライバーが一丸となって、ともに楽しい 1 シーズンを過ごすことができました。スポンサーはじめ、ファン、チームスタッフのみなさんになによりも感謝しています。来年は 43 歳になりますが、ドライバー脇阪寿一としてさらに成長した姿をお見せしたいと思います。オフシーズンに頑張ってクルマを仕上げ、開幕戦で強い戦いを披露したいと思います！」と躍進を誓っている。

2015 年の脇阪のさらなる活躍に期待したい。

### 【Photo Gallery】



